路地や銭湯で遊んだ子ども時代

司会　タレント・俳優・プロボクサー・画家と多方面で才能を発揮されている片岡鶴太郎さん。荒川区西日暮里のご出身で、25年9月には、自伝小説「今日も日暮里」を発表。今回は、小説にも描かれた少年時代の様子などを踏まえて、区長と共に荒川区への想いを大いに語って頂きます。

片岡　子どもの頃は、外で遊ぶことが多かったですね。うちは四畳半一間でしたから、学校から帰ってくるとランドセルを放り投げて外で遊んで、日が暮れてお腹が減ったら帰るという感じでした。ゴロ野球やメンコにベーゴマとか、狭い路地でも工夫して遊んでいました。銭湯も遊び場でしたね。午後3時になると、一番風呂に入って、3・4時間銭湯で友達と遊ぶ。子どもの料金は、15円か、20円くらいで、お風呂屋さんに「あんたたち、元をとるねえ」とあきれられるくらい長くいたので、体がふやけたりしましてね。

区長　私はちょうど鶴太郎さんと一回り違いますけれど、メンコやベーゴマは共通ですね。これに、竹の棒を使ったチャンバラが加わります。銭湯のお話が出ましたが、私たちは銭湯で教育を受けましたよ。お風呂に入る時は、体を洗ってから入れとか、お年寄りの背中を流してあげろとか、色々なことを銭湯で教わりました。銭湯が社交場であり、教育の場でもあるというのは下町独特の世界ですよね。

片岡　やっぱり皆さん裸ですからね、裸の付き合いになる。近所同士、だいたい何時頃に誰が来るか分かっていますからね。

思い出深い先生たち

区長　いつも来ているおじさんがいないとどうかしたのかと心配する。いわゆる見守り機能も有りました。銭湯は下町の生活に欠かせない情報交換の場でしたね。

片岡　中学は荒川十中（現諏訪台中学校）です。大野先生という美術の先生には、卒業後もお世話になりました。僕が芸人になって初めての独演会をする時、お金が無かったもので、大野先生に頼んでガリ版でプログラムを作って頂きました。20歳になってお酒が飲めるようになると、おすし屋さんに連れて行ってもらって、生まれて初めてすしを握ってもらって食べました。先生と二人で頂いた時の感動は忘れられません。後に僕は絵を描くようになりますが、初めての個展に来て下さって、僕の絵を見て頂いたのは印象的でした。

温かく見守り支え、今の私を育ててくれたのは荒川区

片岡 鶴太郎 さん

荒川十中にはもう一人、忘れられない先生がいます。僕は小・中学校と本当に勉強しなかったんですよ。中学3年の1学期に担任の末澤先生に呼ばれて「高校はどうするんだ」と聞かれて、進学したいと言ったら、「お前の成績だと都立は行けないよ」と言う。でも母親は「私立は駄目」と言うので、都立高校に受からなければ、高校に行けなくなってしまう。これは本当に切羽詰まった。中学3年の教科書を見ても全く分からないんです。中学2年・1年のも分からない。小学6年の教科書を見て、やっと何とか分かるかなと思ったので、小学6年の問題集を買ってきて取り組みました。それが終わると、中学1年をやる。夏休みの間ずっと勉強したら、中学3までたどり着きました。数学などは答えがはっきり出ますから、出来るようになると面白くて。夕方4時から初めて、翌朝4時まで勉強し続けました。12時間ぶっ続けでやってもまだ足りないくらい面白かったんです。そして夏休みを終えて、2学期の試験で学年で上位になったんです。それまで後ろから2・3番だったのが、上位10番以内ですからね。末澤先生が飛んできました。夏休みの1カ月間で小学6年から勉強し直したことを言ったら、「おまえは馬鹿じゃないんだ、やれば出来るんだ。よく小学6年からやったなあ」と褒めて下さった。それが今の私の核になっています。「やれば出来る」ということを学んだのが荒川十中でした。

◀片岡鶴太郎さん作の小説を手に

区長　今の鶴太郎さんのお話を伺って、すごいなと思ったのは、小学6年までさかのぼって中学3年まで勉強し直したということ。そうした工夫や努力が今日、絵や書の名人であり、プロボクサーのライセンスも持っていらっしゃるというマルチな才能につながっているんですね。若い皆さんには、今からでも間に合う、自分は駄目だとか思わないで、頑張って欲しいと思いましたね。

家庭、学校、社会、みんなで子どもを育てていく

司会　西川区長は、学校教育の充実に力を入れておられますね。

区長　荒川区は学校図書館が充実しており、小・中学校全校に学校司書を配置しています。「読書マラソン」という取り組みをしていますが、1年間に500冊読破した児童もいます。一方で、電子黒板やタブレット型のパソコンなど最先端の教育ツールの導入も行っています。電子黒板は、区の小・中学校の普通教室には必ず有ります。タブレット型パソコンも、現在4校で先行的に導入し、授業での効果的な活用方法など検証を行っています。世界に通用するコンピュータ技術の持ち主をしっかり育てていきたいと思っています。

更に、子どもを教育するということは、学校だけのものではないと思っています。家庭教育はもちろんですが、地域社会での教育が大事です。そのために、荒川区では町会で小学生の合宿通学を実施しています。町会会館に1泊し、そこでおじさんやおばさんから昔話や地域の歴史を学ぶ。故郷に対する愛着を自然に培うということをして頂いています。

私は鶴太郎さんのご両親をよく存じ上げているのですが、お二人共、地域のために本当に頑張ってこられました。そういう中から、鶴太郎さんのような方が育ってきたということは、大変重要な示唆を与えて頂けると思います。

▲荒川区シンボルキャラクター「あら坊」・「あらみぃ」と一緒に

これからも受け継がれていくべきもの

片岡　僕はアパート住まいで両親が勤めていましたから、学校から帰ってくると独りなんですよ。小学校の低学年の時でしたが、風邪を引いた時に、同じアパートに住んでいる青木のおばちゃんが心配して、出前を取ってくれました。「おかめうどん2つ」って。家では、たぬきかきつねうどんでしたから、具の多いおかめうどんを初めて食べたんです。そのうれしさ、ありがたさは、今でも覚えています。「あったかいうどんを食べて元気になんな」って送り出してくれた青木さんのことは忘れられないですね。

区長　そういう良い意味でのおせっかいのおじさん、おばさんが荒川区には伝統的にいます。地域の子どもも自分の子のように教育してくれるし、見守ってくれる。荒川区には120の町会組織が有ります。それが、優しさ、触れ合い、時には他人の子どもでも厳しく教育するという地域の力になっています。大げさに言えば、見守り力ですね。そういうものが荒川区の大きな財産だと思います。荒川区は治安がとても良いのですが、それも見守り力のおかげです。荒川区は都内屈指の安全・安心な地域ということで、今若い人口が増えています。荒川区の治安の良さは地域力なんですよ。

片岡　荒川区が若い人に魅力的な所になってきているのはうれしいですね。荒川区には独特な下町の人情が残っていますから。それと、ものを作る所だとも思います。これはすごく大事なことだと思います。職人さんが多いということは、素晴らしいことだと思います。あるテレビ番組でふるさと荒川区を旅するというので、手作りカバンの店や鉄工所を訪ねました。そして、どんなに機械化が進んでも最後はやっぱり人間の手でやらなければならないということのすごさと荒川区のものづくりの素晴らしさを感じました。

区長　年1回、荒川区産業功労者表彰式を行っていて、そこで「荒川マイスター」を表彰しています。「荒川マイスター」はもうかなり大勢いらっしゃいますが、前回の表彰式は昨年の10月でした。顔師という日本舞踊の舞台化粧を40年以上続けてこられた方と、製鉄所の築炉の技術を30年以上やってこられた方です。

また、区は伝統工芸技術の保存に努めており、弟子入り希望の方の支援をしています。職人さんの出前授業も小学校で行っています。扇子を作らせたら日本一とか、色々な方がいます。そのような伝統技術の保持者を私たちは支援し育成していきたいと思っています。

魂が歓喜する瞬間をもつ

片岡　子どもの時からたどれば、好きなことをやっていますね。好きなことしか出来ない。自分の魂が歓喜するような状態にいたいといつも思っています。魂の歓喜が私にとっての一番の喜びです。仕事も自分が好きでやっているから、楽しみながらやっている感じです。絵を描いていて、辛くなったらいったん筆を置きます。強いることはしません。ただ、そうは言ってもやらなきゃいけない時もありますが、それでもやっていくと面白くなってくるんです。

全ては反復です。何度もやらないと身に付かない。ボクシングを始めて、トレーニングの縄跳びが飛べなかった時も、反復して何度もするうちに1カ月後には飛べるようになっていました。そのことがすごい歓喜ですね。以前の自分と違う自分がいる喜びです。絵も同じです。40歳を前にして椿を見て感動して、絵を描いてみたいと思って描くんですが、最初は、とてつもなく下手なんです。感動が強すぎるもので描いてみると、そのギャップがひどいんです。その話を美術の評論家の方にしたら、「ほとんど皆そこで止めてしまうのに、よく撤退しなかったですね。なぜなんですか」と言われたんです。僕はその時、心から絵を描きたいと思っていたんです。絵という、本当に心を掛けて集中出来るものが無くなってしまったら、日々うつうつとした時間しか無くなってしまうと思いました。これは描くしかなかった。ただひたすら描きました。反復ですよね。そして、そうやって描いているうちに少しずつ形が見えて来るんですよ。その瞬間がやっぱり魂の歓喜なんでしょうね。

今年の抱負と区民の皆さまへ

片岡　今年の12月で還暦を迎えます。記念の年でもあるし、一つの区切りの年でもあると思います。今は60歳と言ってもまだまだ若い部類ですけれど、改めて自分の人生を振り返る年であると思っております。60年の人生で物心ついて以来、ずっと私を見守り支えて育ててくれたのは、荒川区です。荒川区があったからこそ、今の私のキャラクターも育ったのだと思います。これからも荒川区の方々に楽しく喜んでもらえるような作品を、絵でもお芝居でも作っていきたいと思いますので、機会がありましたらご覧頂きたいと思います。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

区長　自分がどこに住むかという選択は、人から強制されるものではありません。ご自身のお考えや判断で、荒川区にお住まいになっていると思います。そういう皆さんが年ごとに増えていることは、大変光栄に思います。そして、同時にここを選んで良かったと思って頂けるような、温かい区政や居心地の良い街にしていくこと、安全で安心な笑顔あふれる地域を皆さんと協力して作っていくことが、私たち区の職員の何よりの使命だと思います。私たちがいなければ、この国は成り立たないんだ、というくらいの気構えで区政に取り組んでいこうと思っております。

いつまでも荒川区でお幸せに笑顔で暮らして頂けるように工夫を重ねていきますので、本年もどうぞお幸せにお過し頂き、また、区政に対してもご意見を聞かせて頂きたいと思っております。区民の皆さまの本年のご多幸とご健康を心からお祈り申し上げます。

▲片岡鶴太郎さん作の絵画「鷹図」。区役所1階ロビーに展示してあります

俳優・画家 片岡（かたおか） 鶴太郎（つるたろう）さん

昭和29年、荒川区西日暮里生まれ。高等学校を卒業と同時に片岡鶴八氏に師事。3年後ひとりだちし、東宝名人会、浅草演芸場に出演。23歳の頃からテレビに進出。その後、フジテレビ「オレたちひょうきん族」でお茶の間に浸透し、人気を博す。バラエティーを中心に活躍していたが、やがてドラマの分野も開拓。33歳の時、プロボクシングライセンスを取得。その時期に出演した初の映画「異人たちとの夏」が話題を呼び、映画賞、各賞を受賞、役者としての地位も確立。40歳で墨彩画に魅せられ、絵を描き始め、平成7年12月には初の個展を開催、平成10年12月には草津に「片岡鶴太郎美術館」が創設されるなど画家としても活躍。その多芸、多才ぶりは今も健在である。

■主な受賞歴

日本アカデミー賞最優秀助演男優賞、横浜映画祭助演男優賞、毎日映画コンクール新人賞、キネマ旬報助演男優賞、ブルーリボン助演男優賞、報知新聞助演男優賞、2008年度グッドエイジャー賞

ケーブルテレビ（デジタル11ch、アナログ5ch）「こんにちは荒川区」の新春特別番組（1月1日〈祝〉～5日〈日〉午前9時・正午・午後6時・午後9時からの一日4回放送）で、片岡鶴太郎さん、西川区長の対談を放送します。

＊編集・問合せ　広報課　☎内線2133

治安の良さは地域力から。荒川区の伝統を守っていく

荒川区長 西川 太一郎

▼荒川区への想いが熱く語られました（右は、司会のケーブルテレビ・櫻井アナウンサー）